

研究活動報告

特別講演会 (テレ博士およびフォルバー教授)

2001年1月18日(木)午後2時~4時に当研究所で、フランス国立人口研究所(INED)主任研究官のクリスティーヌ・テレ(Christine THERE)博士が「18世紀フランスにおける女性と出生制限—女性作家著書の研究」("Women and Birth Control in Eighteenth-Century France: A Study upon Books of Female Authors")と題された特別講演をされた。テレ博士はINEDで主として人口・経済思想史、歴史人口学の研究に携わって来られ、R. Cantillon, *Essai sur la nature du commerce en général*, Paris, INED, 1997(1755)やINED機関誌*Population*の1998年の歴史人口学特集号、<<Population et Histoire>>の編集もされましたが、今回は1999年に*Eighteenth Century Studies*に発表された英文論文に基づく講演をしていただいた。歴史的なテーマであるため、少数であったが、熱心な聴衆と質疑応答がなされた。

2001年3月19日(月)午後2時~4時に当研究所でマサチューセッツ大学経済学科のナンシー・フォルバー(Nancy FOLBRE)教授が「子どもコスト分配」(Distribution of the Cost of Children)と題された特別講演をされた。フォルバー教授は*Who Pays for the Kids?* (Routledge, 1994)等のご著書で著名なフェミニスト経済学者で、家族政策に対するフェミニスト・アプローチについて講演された。今回は別掲の通り、阿藤誠当研究所長が現地運営委員長を務めた国際人口学会の少子化研究委員会のセミナーのために来日された機会をとらえたものであるが、女性研究者を中心とする多くの聴衆と活発な議論が行われた。なお、特別講演のベースとなったこのセミナー論文を含む最近の論文はマサチューセッツ大学経済学科のフォルバー教授のホームページからダウンロードできる。(小島 宏記)

特別講演会 (ジョン・ボンガ - ツ博士)

米国の非営利研究機関ポピュレ - ション・カウンスル(Population Council)の副会長をつとめるジョン・ボンガ - ツ博士(Mr. John Bongaarts)が来日し、2月21日本研究所で標記の講演をおこなった(原題:Fertility and reproductive preferences in post-transitional societies)。ボンガ - ツ博士はオランダ出身で、1973年以来ポピュレ - ション・カウンスルに籍を置き人口学者として多方面にわたり精力的に活動しているが、とりわけ「ボンガ - ツ・モデル」として知られる出生力の近接要因の研究は有名である。最近では合計特殊出生率から出生のタイミング効果を除いた指標として調整合計特殊出生率(Adjusted TFR)を提案して論議を呼んでいる(*Population and Development Review*, 24巻2号pp.271-291および26巻3号pp.560-564参照)。本講演でも日本を含めた先進諸国の近年の出生率低下について同指標を用いた説明がなされ大変興味深いものがあった。多数の来聴者があり質疑応答も盛り上がった。

なおボンガ - ツ博士は本講演の前日、国際協力事業団本部で「21世紀の人口問題と人口動向」と題して講演し、途上地域では今後も急速な人口増加が続き、環境、経済、公共サ - ビスなどの面で深刻な影響が生じることに懸念を示した。対策は、家族計画およびリプロダクティブ・ヘルスプログラムの強化、人的資本への投資と女性の地位の改善、出産年齢を高めることと思春期への取り組み、の3点に要約された。博士の現実的な政策志向と議論の明快さには定評があるが改めて感銘を受けた。

(佐藤龍三郎記)